コンビニぞめき

「週末寸言」原稿　061021

ある人、自分の子供を立派な法師にして、「学問して因果の理をも知り、説経などして世渡る生計」とさせたいと考えた。そこで、何はともあれ乗馬の訓練から始めた。説経師ともなると、法事の導師として招かれた時に、馬で迎えにこられるかもしれない。そんな時、乗馬の心得がないばっかりに落馬するなどというのはみっともない、と思ったからである。次に、仏事の後、酒宴などが開かれるだろうが、法師の無芸大食というのは、仏事の主催者である檀那にとっても面白くないだろうから「今様」などという流行歌なども習い始めた。こうして、「二つのわざ、ようよう境に入りければ、いよいよよくしたく覚えて嗜みけるほどに、説経習うべき隙なくて、年寄りにけり。（乗馬も流行歌も上手になってくると、もっとうまくなろうと夢中になってしまって、ついに法師になるための勉強をしないまま年老いてしまった）」。引用は『徒然草』の有名な１８８段「或者、子を法師になして」の書き出し部分である。

昔読んだこの一文を思い出したのは、ある新聞記事を読んだからである。それによれば、とある地方大学では構内にコンビニエンスストアを招致するという。記事によれば、構内にコンビニがあることで若者が魅力を感じ、応募者が増えて発展する、と大学では考えているという。

たしかに大学の近くにはコンビニが多く集積していて、そこには近くの大学の学生たちが週刊誌や漫画本に群がって立ち読みをしている姿が見られる。大学構内では講義や実験・実習が行われているだろうと思われる時刻にだ。これらのコンビニでは、従業員も近隣大学の学生アルバイトで終日まかなっているとも聞く。今や、大学生とコンビニは切っても切れない相思相愛の仲ではあるらしい。

『徒然草』流に云えば、かくて「説経師」にならんとして「大学」に入ったものの、立ち読みの漫画本とアルバイトのコンビニ店長の二つのわざ「いよいよよくしたく覚えて嗜みけるほどに、学問習うべき隙なくて、年寄りにけり。」とならないのだろうか。

この記事を読んでいて、もう一つ思い出したものがある。それは、毎夜毎夜吉原の華街に通ってばかりいるドラ息子に手を焼いた大店の父親が、店の二階に吉原そっくりの街並みを作ってやって、大いに息子に喜ばれた話・古典落語の名作「二階ぞめき」である。

「コンビニぞめき」に誘われてやってくるような学生にこの大学は何を教育しようというのだろう。大学は「教育と研究」で堂々と勝負をすべきだ。それが有為な若者をひきつける王道だと思うのだが。